

2008 年 11 月号 目次

【トピックス】

遺伝子組換え食品の検査	1
残留農薬検査(その2)	3
牛肉中の動物用医薬品検査	6
養殖魚介類中の抗生物質、合成抗菌剤検査結果	7

【感染症発生動向調査】

感染症発生動向調査委員会報告 10月	8
感染症発生動向調査における病原体検査 10月	11

【検査結果】

由来別病原菌検出状況 10月	12
----------------	----

【情報提供】

衛生研究所 WEB ページ情報(20年度10月分)	13
---------------------------	----

遺伝子組換え食品の検査

平成20年9月に、食品専門監視班、本場食品衛生検査所、南部市場食品衛生検査所及び福祉保健センターが収去した計53検体について、遺伝子組換え食品の検査を実施しました。

遺伝子組換え食品は、内閣府にある食品安全委員会で安全性に問題ないと判断され、承認された品種が国内に流通しています。遺伝子組換え食品の検査は、未承認の品種が流通していないかの検査として定性検査(食品中に対象の遺伝子組換え品種が含まれているかを調べる検査)を行い、承認済みの品種については「遺伝子組換えでない」などの表示が適正であるかの検査として、定量検査(食品中に対象の遺伝子組換え品種がどのくらい含まれているかを調べる検査)を行っています。

今回は、未承認の品種の55-1パパイア、Bt10トウモロコシ及びBtコメ¹の定性検査、並びに承認済みの品種のラウンドアップ・レディー・大豆、CaM組み込みトウモロコシ(Event176、Bt11、T25、Mon810)及びGA21トウモロコシの定量検査を実施しました。なお、トウモロコシ粉碎品については定性と定量の両方の検査を行いました。

1 定性検査(未承認の品種の検査)

原材料表示にトウモロコシの記載がある食品19検体(スナック菓子など)について、Bt10トウモロコシの定性検査を行いました。また、コメ加工品21検体(ビーフン、米菓など)についてBtコメの定性検査を、パパイア3検体については、55-1パパイアの定性検査を行いました。その結果、いずれも不検出であり違反検体はありませんでした(表1、2、3)。

表1 Bt10トウモロコシの定性検査

品名	検体数	検出数
スナック菓子	11	0
トウモロコシ粉碎品 ²	2	0
コーン茶	2	0
タコシエル、トルティーヤ	3	0
メキシコ料理用調味料	1	0

表2 Btコメの定性検査

品名	検体数	検出数
フォー、ビーフン、ライスパスタ	7	0
ライスペーパー	7	0
米菓	5	0
米粉	1	0
餅	1	0

表3 55-1パパイアの定性検査

品名	検体数	検出数
パパイア	3	0

2 定量検査(承認済みの品種の検査)

大豆加工品(豆腐)6検体及び大豆穀粒4検体についてラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査を行いました。また、トウモロコシ粉碎品2検体についてCaM組み込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシ³の定量検査を行いました。その結果いずれも混入率は5%以下⁴であり、違反検体はありませんでした(表4、5)。

表4 ラウンドアップ・レディー・大豆の定量検査

品名	検体数	「遺伝子組換え」の表示	混入率5%を超える検体数
豆腐	6	なし	0
大豆穀粒	4	なし	0

表5 CaM組み込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシの定量検査

品名	検体数	「遺伝子組換え」の表示	混入率5%を超える検体数
トウモロコシ粉碎品 ²	2	なし	0

¹ 平成18年9月、欧州に輸入されている中国産のコメ加工品(ビーフン等)から、遺伝子組換えコメを検出したとの調査結果が環境保護団体から発表されました。それに伴い、同年9～12月にかけて厚生労働省(検疫所)で中国産のコメ加工品を検査したところ、154件中6件(ビーフン5件、もち粉1件)からBtコメが検出されました。このことを受け、平成20年度の重点検査としてBtコメの検査を実施しています。

² Bt10トウモロコシの定性検査を行ったトウモロコシ粉碎品と、CaM組み込みトウモロコシ及びGA21トウモロコシの定量検査を行ったトウモロコシ粉碎品は同じ検体です。

³ 遺伝子組換えトウモロコシ混入率は、安全性審査を経た5種類の遺伝子組換えトウモロコシ(Event176、Bt11、T25、Mon810、GA21)の各混入率を合計したのになります。そのうち4種類(Event176、Bt11、T25、Mon810)については、共通してCaM配列が組み込まれているためスクリーニング検査で4種類の混入率合計値を推定することができます。GA21トウモロコシはCaM配列が組み込まれておらずスクリーニング検査で定量できないため個別に定量を行います。スクリーニングの値とGA21の値の合計が5%を超える疑いがある場合は、あらためて5種類個別の定量を行う必要があります。

⁴ 安全性審査承認済みの遺伝子組換え農作物及びこれを原材料とする加工食品は「遺伝子組換え」である旨の表示が義務付けられています。しかし、遺伝子組換え品種の混入率が5%以下なら表示義務はなく、「遺伝子組換えではない」等の表示をすることもできます(ただし、書類等でIPハンドリング(分別生産流通管理)が確認ができること、意図的に遺伝子組換え食品を混入していないことが前提になります)。そのため、承認済みの遺伝子組換え品種の検査では、混入率が5%を超えているかどうかを調べることになります。

【 食品添加物担当 】

残留農薬検査(その2)

当所では、横浜市内に流通する農作物や食肉等の食品に残留する農薬について検査を行っています。今回は平成20年6月から10月の期間に行われた検査結果を報告します。

1 国内産農作物

国内産農作物の検査は今年度2回目の実施となりました。今回は、8月に食品専門監視班によって搬入されたピーマン、かぼちゃ、もも、ぶどう(各3検体)の計12検体について約90項目の残留農薬検査を行いました(表1)。

その結果、ピーマン1検体からクロルフェナピルが0.04ppm検出され、ぶどう1検体からクレソキシムメチル0.09ppm、他のぶどう1検体からペルメトリン0.16ppmがそれぞれ検出されました。ただし、すべて残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした(表2)。

2 輸入農作物

昨年度千葉・兵庫両県で発生した『中国産冷凍ギョウザが原因と疑われる健康被害事例』を受けて、今年度は冷凍農作物を対象に実施しました。7月に食品専門監視班によって搬入された赤ピーマン(2検体)、ほうれんそう、さといも及びいんげん(各1検体)の計5検体について約90項目の農薬検査を行いました(表1)。

その結果、赤ピーマン1検体からクロルピリホスが0.03ppm検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした(表2)。

3 市内産農作物

横浜市内で生産されている農作物(横浜ブランド『はま菜ちゃん』)の検査は今年度2回目の実施となりました。今回は、7月に食品専門監視班によって搬入されたじゃがいも、なす、きゅうり及びトマト(各2検体)の計8検体について約90項目の農薬検査を行いました(表1)。

その結果、なす1検体からテブフェンピラドが0.13ppm検出されました。ただし、残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした(表2)。

4 福祉保健センター独自事業(茶等)

今年度のセンター独自事業は、茶等について重点的に実施しました。6月に西福祉保健センターによって搬入されたハーブティー(ペパーミント及びカモミールの各1検体、計2検体)、ほうじ茶、番茶及び烏龍茶(各1検体)の計5検体について約90項目の農薬検査を行いました(表1)。

その結果、番茶からアセタミプリド0.39ppm、クロルフェナピル0.01ppm及びテブコナゾール2.7ppmが検出されました。ただし、すべて残留農薬の基準値を超えるものはありませんでした(表2)。

5 輸入豚肉

9月に食品専門監視班によって搬入された輸入豚肉10検体の脂肪部位について5項目の有機塩素系農薬(総BHC、総DDT、エンドリン、ディルドリン(アルドリンを含む)及び総ヘプタクロル)の検査を行いました。

その結果、すべての検体から農薬は検出されませんでした(表2)。

表1 農作物、茶等の検査項目及び検出限界(92項目)

農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)	農薬名	検出 限界 (ppm)
有機リン(P)系農薬(38)			有機塩素(Cl)系農薬(16)		
EPN	0.01	テルブホス	0.005	BHC(α 、 β 、 γ 及び δ の和)	0.005
イソフェンホス	0.01	トルクロホスメチル	0.01	γ -BHC(リンデン)	0.002
イプロベンホス	0.01	パラチオン	0.01	DDT(DDE,DDD,DDTの和*)	0.005
エチオン	0.01	ピペロホス	0.01	アルドリン及びディルドリン	0.005
エトプロホス	0.005	ピリダフェンチオン	0.01	エンドスルファン (α 及び β の和)	0.005
エトリムホス	0.01	ピリミホスメチル	0.01	エンドリン	0.005
カズサホス	0.01	フェントロチオン	0.01	クロルフェナピル	0.01
クロルピリホス	0.01	フェンクロルホス	0.01	クロルフェンソン	0.01
クロルピリホスメチル	0.01	フェンスルホチオン	0.01	ジクロラン	0.01
クロルフェンビンホス	0.01	フェンチオン	0.01	ジコホール	0.01
シアノフェンホス	0.01	フェントエート	0.01	テトラジホン	0.01
シアノホス	0.01	ブタミホス	0.01	トリアジメホン	0.01
ジオキサベンゾホス	0.01	プロチオホス	0.01	プロシミドン	0.01
ジクロフェンチオン	0.01	プロバホス	0.01	プロピザミド	0.01
ジメチルビンホス	0.01	ホサロン	0.01	ブromoプロピレート	0.01
ジメトエート	0.01	マラチオン	0.01	ヘプタクロル(エポキシドを含む)	0.005
スルプロホス	0.01	メチダチオン	0.01		
ダイアジノン	0.01	メチルパラチオン	0.01		
テトラクロルビンホス	0.01	メビンホス	0.01		
窒素(N)系農薬(25)			ピレスロイド(Py)系農薬(13)		
アセタミプリド	0.01	ピリプチカルブ	0.01	アクリナトリン	0.01
イソプロカルブ	0.01	ピリプロキシフェン	0.01	シハロトリン	0.01
エスプロカルブ	0.01	ピリミノバックメチル	0.01	シフルトリン	0.01
カフェンストロール	0.01	フェナリモル	0.01	シペルメトリン	0.01
クレソキシムメチル	0.01	ブタクロール	0.01	テフルトリン	0.01
クロルプロファミ	0.01	フルジオキシニル	0.01	デルタメトリン及びトラロメトリン	0.01
シメトリン	0.01	フルトラニル	0.01	ハルフェンプロックス	0.01
チオベンカルブ	0.01	プロメカルブ	0.01	ピフェントリン	0.01
チフルザミド	0.01	ヘキサコナゾール	0.01	フェンバレレート	0.01
テトラコナゾール	0.01	ペンコナゾール	0.01	フェンプロバトリン	0.01
テブコナゾール	0.01	メトラクロール	0.01	フルシトリネート	0.01
テブフェンピラド	0.01	メトリブジン	0.01	フルバリネート	0.01
トリアジメノール	0.01			ペルメトリン	0.01

*DDTはp,p'-DDE,p,p'-DDD,o,p'-DDT及びp,p'-DDTの和

表2 農作物、茶等及び輸入豚肉の残留農薬検査結果

(H20年6月～10月)

農作物	産地	検査 検体数	農薬検出 検体数	検出農薬名	検出値 (ppm)	基準値 (ppm)
国内産農作物						
ピーマン	国産	3	1	クロルフェナピル	0.04	1
かぼちゃ	国産	3	0			
もも	国産	3	0			
ぶどう	国産	3	1	クレソキシムメチル	0.09	15
			1	ペルメトリン	0.16	5.0
輸入農作物						
赤ピーマン	ポルトガル	2	1	クロルピリホス	0.03	0.5
ほうれんそう	中国	1	0			
さといも	中国	1	0			
いんげん	タイ	1	0			
市内産農作物						
じゃがいも	横浜市	2	0			
なす	横浜市	2	1	テブフェンピラド	0.13	0.5
きゅうり	横浜市	2	0			
トマト	横浜市	2	0			
茶等						
ペパーミント	国産	1	0			
カモミール	国産	1	0			
ほうじ茶	国産	1	0			
番茶	国産	1	1	アセタミプリド	0.39	50
				クロルフェナピル	0.01	50
				テブコナゾール	2.7	30
烏龍茶	国産	1	0			
輸入豚肉						
脂肪部位	アメリカ	3	0			
	カナダ	1	0			
	デンマーク	3	0			
	ハンガリー	1	0			
	メキシコ	2	0			

【 微量汚染物担当 】

牛肉中の動物用医薬品検査

平成20年6月に食品専門監視班が収去した、市内に流通する輸入牛肉の筋肉10件について、動物用医薬品の合成抗菌剤28項目の検査を行いました。また、この牛肉の脂肪10件について、内寄生虫用剤3項目の検査を行いました。その結果、いずれの項目も不検出でした。

表 牛肉中の動物用医薬品検査結果

項目名	件数	検出件数	検出限界	検査結果	基準値
【合成抗菌剤】					
エンロフロキサシン(シプロフロキサシンを含む)	10	0	0.005	N.D.	0.05 以下
オキシリニック酸	10	0	0.01	N.D.	1 以下
オフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	含有しない
オルピフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
オルメトプリム	10	0	0.02	N.D.	0.02 以下
クロピドール	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
サラフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	含有しない
ジフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.4 以下
スルファキノキサリン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファジアジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファジミジン	10	0	0.01	N.D.	0.10 以下
スルファジメトキシシン	10	0	0.01	N.D.	0.05 以下
スルファドキシシン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファピリジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファメトキサゾール	10	0	0.01	N.D.	含有しない
スルファメトキシピリダジン	10	0	0.01	N.D.	含有しない
スルファメラジン	10	0	0.01	N.D.	0.1 以下
スルファモノメトキシシン	10	0	0.01	N.D.	0.01 以下
ダノフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.20 以下
チアンフェニコール	10	0	0.01	N.D.	0.02 以下
トリメトプリム	10	0	0.02	N.D.	0.05 以下
ナリジクス酸	10	0	0.01	N.D.	0.03 以下
ノルフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	含有しない
ピリメタミン	10	0	0.02	N.D.	含有しない
ピロミド酸	10	0	0.01	N.D.	含有しない
フルメキン	10	0	0.01	N.D.	0.5 以下
フロルフェニコール	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
マルボフロキサシン	10	0	0.01	N.D.	0.2 以下
【内寄生虫用剤】					
イベルメクチン	10	0	0.005	N.D.	0.040 以下
エプリノメクチン	10	0	0.005	N.D.	0.25 以下
モキシデクチン	10	0	0.005	N.D.	0.50 以下

単位：ppm N.D.：不検出 基準値は収去時のもの

【微量汚染物担当】

養殖魚介類中の抗生物質、合成抗菌剤検査結果

平成20年6～8月に食品専門監視班が収去した、市内流通のうなぎ目魚類(ウナギ4件)、さけ目魚類(アユ1件、ぎんざけ3件、アトランティックサーモン2件、トラウトサーモン1件、ニジマス1件)、すずき目魚類(ブリ3件、マダイ1件)及び、魚介類加工品(ウナギ蒲焼3件、ムキエビ1件)の計20件について、抗生物質3項目、合成抗菌剤28項目の検査を行いました。輸入うなぎ(2件)及び魚介類加工品(4件)については、抗生物質のクロラムフェニコールと合成抗菌剤のマラカイトグリーンの検査も行いました。その結果、表に示したように、いずれの項目も不検出でした。今回の検査において、原料が輸入品であったものはウナギ2件(中国産、台湾産)、ぎんざけ1件(チリ産)、アトランティックサーモン2件(ノルウェー産)、トラウトサーモン1件(チリ産)、ウナギ蒲焼1件(中国産)で、その他のものは国内産でした。

表 養殖魚介類の検査結果

項目名	件数	検出限界	検査結果 (カッコ内の数字は基準値)			
			うなぎ目<4件>	さけ目<8件>	すずき目<4件>	魚介類加工品<4件>
【抗生物質】						
オキシテトラサイクリン	20	0.02	N.D. (0.2)	N.D. (0.2)	N.D. (0.2)	N.D. (*)
クロルテトラサイクリン	20	0.03	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
テトラサイクリン	20	0.02	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
【合成抗菌剤】						
エンロフロキサシン (シプロフロキサシンを含む)	20	0.005	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
オキシリニック酸	17	0.01	N.D. (0.05)	N.D. (0.05)	N.D. (0.05)	N.D. (*)
オフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
オルビフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
オルメトプリム	17	0.02	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	N.D. (*)	N.D. (*)
クロピドール	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
サラフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (0.03)	N.D. (*)	N.D. (*)
ジフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファキノキサリン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファジアジン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (0.1)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファジミジン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファジメトキシシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (0.1)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファドキシシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファピリジン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファメトキサゾール	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファメトキシピリダジン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファメラジン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
スルファモノメトキシシン	17	0.01	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	N.D. (*)
ダノフロキサシン	17	0.01	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	N.D. (0.1)	N.D. (*)
チアンフェニコール	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (0.02)	N.D. (*)
トリメトプリム	17	0.02	N.D. (0.05)	N.D. (0.08)	N.D. (0.05)	N.D. (*)
ナリジクス酸	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
ノルフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
ピリメタミン	20	0.02	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
ピロミド酸	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
フルメキン	17	0.01	N.D. (0.6)	N.D. (0.5)	N.D. (0.04)	N.D. (*)
フロルフェニコール	17	0.01	N.D. (0.2)	N.D. (0.2)	N.D. (0.03)	N.D. (*)
マルボフロキサシン	20	0.01	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)	N.D. (*)
クロラムフェニコール	6	0.0005	N.D. (不検出)	-	-	N.D. (不検出)
マラカイトグリーン	6	0.002	N.D. (不検出)	-	-	N.D. (不検出)

単位: ppm N.D.: 不検出 *: 「含有しない」

【微量汚染物担当】

感染症発生動向調査委員会報告 10月

今月のトピックス

レジオネラ症の報告数が、今年に入ってから27例と多い
RSウイルス感染症、インフルエンザは昨シーズンと同様に早く増加の兆し
百日咳の報告数は昨年より多く、DPT接種歴のある幼児においても発生している

【患者定点からの情報】

市内の患者定点は、小児科定点：88か所、内科定点：57か所、眼科定点：18か所、性感染症定点：26か所、基幹(病院)定点：3か所の計192か所です。なお、小児科定点は、インフルエンザと小児の13感染症とを報告します。内科定点はインフルエンザのみを報告します。従ってインフルエンザは、小児科と内科で、計145定点から報告されます。

平成20年 週 - 月日対照表

第39週	9月22～28日
第40週	9月29～10月5日
第41週	10月6～12日
第42週	10月13～19日
第43週	10月20～26日

平成20年9月22日から平成20年10月26日まで(平成20年第39週から第43週まで。ただし、性感染症については平成20年9月分)の横浜市感染症発生動向評価を、標記委員会において行いましたのでお知らせします。

全数把握の対象

< 腸管出血性大腸菌感染症 >

10月の報告数は、30日現在で5例です。うち、10代の女性がHUSを起こし入院となりました。年齢の内訳は、10代が1例、20代が1例、30代が2例、40代が1例でした。

< レジオネラ症 >

10月は30日現在で5例の報告がありました。1月からの報告数は27例となり、多かった昨年1年間の28例に近い報告数です。うち、40代の男性がレジオネラ症と診断された後に亡くなっています。

全国でも、第43週までの累計は738例と、すでに昨年の報告数を上回っています。(表参照)

レジオネラ症の報告数の年別推移(2000年～2008年43週)

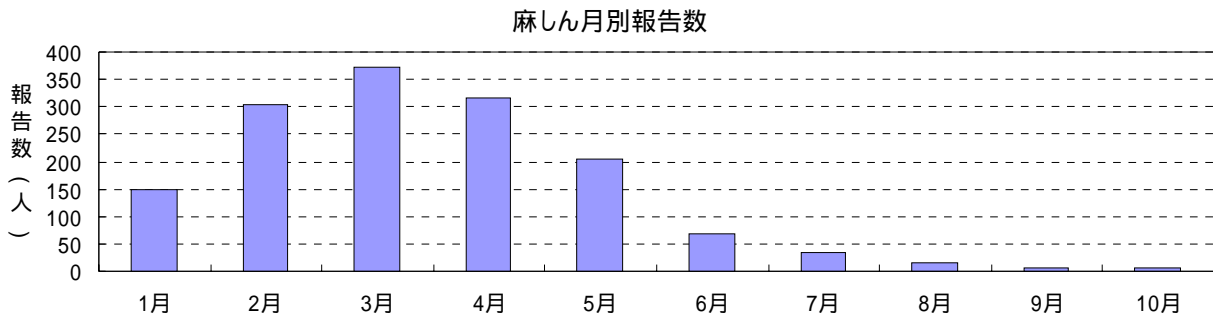
	2000年	2001年	2002年	2003年	2004年	2005年	2006年	2007年	2008年
全国	154	86	167	146	161	281	514	665	738
神奈川県	2	2	4	6	6	19	26	43	46
横浜市(再掲)	0	0	3	2	1	8	7	28	27

レジオネラ症については、2003年4月より、尿中レジオネラ抗原検査が保険適用になり、診断が迅速に出来るようになりました。しかし、レジオネラ肺炎は、早期に適切な治療(マクロライド系、ニューキノロン系、リファンピシンの投与等)を行わないと、症状が急激に悪化したり、致命的になる場合があります。高齢者や、糖尿病などの基礎疾患がある人は注意が必要です。また、肺炎患者においては、循環式浴槽やジャグジーなどの入浴施設の利用を確認する事も必要と思われれます。

< 麻しん >

1月から感染症法の5類感染症の全数把握の対象となり、診断した医師すべてに届出が義務付けられました。(国立感染症研究所ホームページ <http://idsc.nih.go.jp/disease/measles/index.html>)

横浜市では、第43週(10/20～26)までの累計報告数は1474例で、全国の報告数10871例の13.6%です。最近5週間(第39週～第43週)の報告数は8例で、全国の報告数77例の10.4%となっています。年齢別では、約半数が10代で、予防接種前の0歳にも多く発症しています。また、全体の約半数が予防接種未接種でした。



2012年の麻しん排除に向けて、予防接種の徹底が最も大切です。

横浜市では、緊急対策として、未接種・未り患者への市費による予防接種(任意接種)を実施しています。

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/oshirase/mr-kinkyu.html>

1歳～高校3年生に相当する年齢の未接種・未り患者は、この機会に早めに接種していただくことが重要です。

横浜市の詳細については、「横浜市における麻しん患者届出状況(2008年)」

<http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/eiken/idsc/rinji/measles/measles.html> をご覧ください。

《日本は、2008年～2012年の5年間で、麻疹排除を目指します》

風しんとともに全数報告疾患として、発生状況等を詳細に把握

1歳および就学前1年間の、麻しん風しん混合ワクチンによる2回接種の徹底

5年間に限り、中1及び高3相当の年齢の者への定期接種を実施

定点把握の対象

< インフルエンザ >

第40週に今シーズン初発のA型インフルエンザの報告が戸塚区からあり、第41週には栄区からB型インフルエンザの初発の報告がありました。初発の報告は、過去6年間で最も流行開始が早かった昨年と同時期です。

これまでに、戸塚、栄、瀬谷、鶴見、旭、金沢の6区から報告があり、第43週の定点あたり報告数は0.07でした。これから流行期に入っていくと思われるので注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.01、川崎市は0.00、全国は0.06でした。

横浜市では、高齢者の方がインフルエンザ予防接種を受ける場合、接種費用の助成を行っています。

http://www.city.yokohama.jp/me/kenkou/influenza/influ_yobou.html

< RSウイルス感染症 >

例年冬季に流行が見られますが、今年は立ち上がり早く、第37週から増加の兆しが見られ、第42週には定点あたり0.49、第43週は0.47と過去のピーク時に近い値となりました。今後も増加の可能性がありますので動向に注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.26、川崎市は0.55、全国は0.59でした。

< A群溶血性レンサ球菌咽頭炎 >

今シーズンは過去6年間で最も高い値で推移しています。第43週は定点あたり1.22でした。行政区別では港北区(5.00)、中区(4.67)が高くなっています。今後の動向に注意が必要です。川崎市は2.39と高く、神奈川県(横浜、川崎を除く)は0.95、全国は1.42でした。

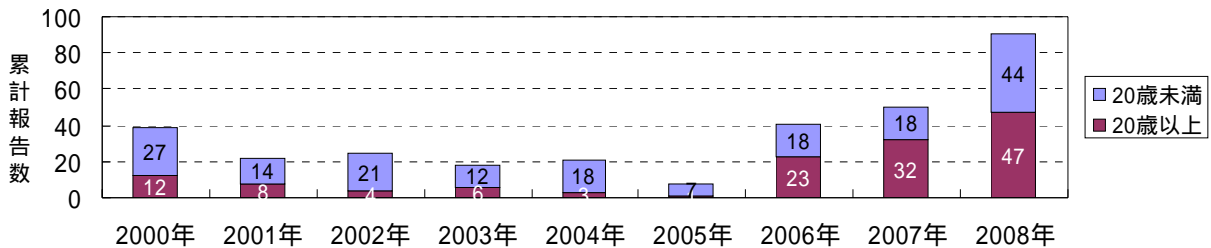
<手足口病>

第30週に定点あたり4.06とピークを迎え、その後はあまり減少せず、第43週は定点あたり1.52と流行が小さかった年のピーク時くらいの値を推移しています。行政区別では、磯子区(5.25)、港南区(3.60)、中区(3.33)となっています。秋に小さな流行が見られることがありますので今後の動向に注意が必要です。神奈川県(横浜、川崎を除く)は1.18、川崎市は0.45、全国は0.85でした。

<百日咳>

第43週は13例の報告がありました。1月からの報告数は91例となり、現時点ですでに昨年(2007年)の報告数50例を大きく上回っています。成人とともに、DPT接種後の幼児の報告も見られており、今後注意が必要です。

百日咳の累計報告数の年別推移(2000年～2008年第43週)



<性感染症>

性感染症は、診療科でみると産婦人科系の11定点、および泌尿器科・皮膚科系の15定点からの報告に基づき、1か月単位で集計されています。

9月は、8月に比べて性器クラミジア感染症はやや増加傾向ですが、他は横ばいです。19歳以下の若年層については、男性は性器クラミジア感染症で3例、女性は性器クラミジア感染症で2例、性器ヘルペスウイルス感染症で1例、尖圭コンジローマで1例、淋菌感染症で1例と、8月に比べて多くなっています。

【病原体定点からの情報】

市内の病原体定点は、小児科定点:8か所、インフルエンザ(内科)定点:5か所、眼科定点:1か所、基幹(病院)定点:3か所、の計17か所を設定しています。検体採取は、小児科定点8か所を2グループに分け、4か所ごと毎週実施し、インフルエンザ定点は特に冬季のインフルエンザ流行時に実施しています。眼科と基幹定点は、対象疾患の患者から検体採取ができた時に随時実施しています。

衛生研究所から

<ウイルス検査>

2008年10月に病原体定点から搬入された検体は、小児科定点は27件(鼻咽頭ぬぐい液)、基幹定点は7件(髄液3件、血清2件、咽頭ぬぐい液、喀痰各1件)でした。患者の診断名別内訳は、小児科定点は上気道炎10人、気管支炎8人、手足口病8人、下痢1人、基幹定点は、脳炎・脳症2人、肺炎、発疹、播種性血管内凝固症候群各1人した。

11月10日現在、小児科定点の手足口病患者6人からコクサッキーウイルスA16型(5人)、エンテロウイルス71型(1人)、上気道炎患者2人からパラインフルエンザウイルス2型、別の上気道炎患者1人からポリオウイルス1型、下痢症患者1人からポリオウイルス2+3型が分離されています。これ以外にPCR検査では、小児科定点の気管支炎患者4人と上気道炎患者2人からRSウイルス、手足口病患者2人からコクサッキーウイルスA16型が検出されています。

その他の検体は引き続き検査中です。

(毎年4月と10月に、ポリオウイルスの予防接種が実施されています)

<細菌検査>

10月の感染性胃腸炎関係の受付は7菌株で毒素原性大腸菌が1件検出されました。溶血性レンサ球菌咽頭炎の検体の受付は4件でA群溶血性レンサ球菌が4件検出されました。

感染症発生動向調査における病原体検査 10月

感染性胃腸炎

2008年10月

検査年月	10月		2008年1～10月		
	定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数			7		72
菌種名					
サルモネラ					
腸管病原性大腸菌					2
毒素原性大腸菌			1		2
組織侵入性大腸菌					
腸管出血性大腸菌					3
腸管凝集性大腸菌					
黄色ブドウ球菌					
カンピロバクター					
不検出			6		65

呼吸器感染症等

2008年10月

検査年月	10月		2008年1～10月		
	定点の区別	小児科	基幹	小児科	基幹
件数		4		44	1
菌種名					
A群溶血性レンサ球菌	T1			1	
	T3			8	
	T4	2		8	
	T12	1		8	
	T13			1	
	T25			5	
	T28			3	
	T B3264	1		1	
	T 型別不能				
B群溶血性レンサ球菌					
G群溶血性レンサ球菌				1	
インフルエンザ菌					
パラインフルエンザ菌					
黄色ブドウ球菌					
髄膜炎菌					1
インフルエンザ菌					
不検出		0		8	0

T(T型別): A群溶血性レンサ球菌の菌体表面のトリプシン耐性T蛋白を用いた型別方法

[細菌担当]

由来別病原菌検出状況 10月

2008年10月

検体の種類	分離菌株数					
	ヒト		環境		食品	
	糞便、尿、咽頭ぬぐい液、 喀痰等 菌株による依頼を含む		河川水、河川底泥等		食品、食品容器等のふきとり、 飲料水等	
	10月	2008年1-10月	10月	2008年1-10月	10月	2008年1-10月
コレラ O - 1		1				
O - 1以外		1		4		
赤痢菌 A						
B		3				
C		1				
D	1	8				
その他						
チフス菌	1	4				
パラチフスA菌	1	5				
その他のサルモネラ						
O4群		1				
O7群		6				
O8群						
O9群	1	2				
O3,10群						
その他						
腸管病原性大腸菌		2				
毒素原性大腸菌	1	11				
組織侵入性大腸菌						
腸管出血性大腸菌	5	39				1
腸管凝集性大腸菌		1				
腸炎ビブリオ		2				
黄色ブドウ球菌	32 *	60			12 *	15
カンピロバクター	15	54				4
ウェルシュ菌		11				1
A群溶血性レンサ球菌	4	34				
B群溶血性レンサ球菌						
レジオネラ	2	3				
セレウス菌		4				7
その他		1				
取り扱い件数	123		1		22	

* 黄色ブドウ球菌による集団食中毒事例分離株(食中毒患者:28株、食品由来:食品7株、フキトリ:5株)および MRSA 3株

【細菌担当】

衛生研究所WEBページ情報

(アクセス件数・順位 20年度9月分、電子メールによる問い合わせ・追加・更新記事 20年度10月分)

横浜市衛生研究所ホームページ(衛生研究所WEBページ)は、1998年3月に開設され、感染症情報、保健情報、食品衛生情報、生活環境衛生情報等を提供しています。

2008年4月、市民にわかりやすくかつ迅速な情報提供を目指して、リニューアルを行いました。

今回は、2008年9月のアクセス件数、アクセス順位及び2008年10月の電子メールによる問い合わせ、WEB追加・更新記事について報告します。

なお、アクセス件数については行政運営調整局IT活用推進課から提供されたデータを基に集計しました。

1 利用状況

(1) アクセス件数 (2008年9月)

2008年9月の総アクセス数は、105,548件でした。主な内訳は、感染症49.8%、食品衛生21.6%、保健情報9.0%、検査情報月報3.3%、生活環境衛生2.6%、薬事2.0%でした。

(2) アクセス順位 (2008年9月)

9月のアクセス順位(表1)は、「マイコプラズマ肺炎について」が第1位でした。

2位が「百日咳について」、7位が「A群溶血性連鎖球菌感染症」と、注目されている感染症の記事が入っています。

国立感染症情報センターによると、2008年第43週(10月20～26日)における定点当たりの報告数は、いずれの疾患も増加傾向を示しており、過去5年間の同時期と比較すると多くなっています。

3位に「電子パンフレット(レジオネラ症を防止するために)」が入っています。

東京都内の温泉付きマンションで、湯を浄化して戻す循環式の温泉給湯設備から国の基準値を大幅に上回るレジオネラ菌が検出され、給湯を中止したり、神奈川県の水プールでは、一部の利用を休止したりしています。

また、8位に「電子パンフレット(MRSA)」が入りました。

表1 2008年9月 アクセス順位

順位	タイトル	件数
1	マイコプラズマ肺炎について	6,789
2	百日咳について	3,140
3	電子パンフレット(レジオネラ症を防止するために)	2,826
4	英字略語集(ABC順)	2,127
5	大麻(マリファナ)について	1,893
6	ちょっと専門的なデータシート	1,820
7	A群溶血性連鎖球菌感染症について	1,372
8	電子パンフレット(MRSA)	1,145
9	感染症発生状況	1,033
10	食品添加物における用語説明	950

データ提供: 行政運営調整局IT活用推進課

(3) 電子メールによる問い合わせ (2008年10月)

2008年10月にホームページのお問合わせフォームを通していただいた電子メールによる問い合わせの合計は、5件でした(表2)。

表2 2008年10月 電子メールによる問い合わせ

内容	件数	回答部署
ホームページのリンクについて	1	衛生研究所
段ボール箱の検査について	1	衛生研究所
新型インフルエンザについて	1	衛生研究所
麻疹ワクチン接種後の避妊期間について	1	衛生研究所
水痘帯状疱疹について	1	衛生研究所

2 追加・更新記事 (2008年10月)

2008年10月に追加・更新した主な記事は、5件でした(表3)。

表3 2008年10月 追加・更新記事

掲載月日	内容	備考
10月1日	百日咳について	更新
10月7日	感染症に気をつけよう (10月号)	追加
10月14日	2008(平成20)年度のインフルエンザワクチンについて	更新
10月16日	ウエストナイルウイルス(蚊)の検査結果	更新
10月24日	E型肝炎について	更新

【 感染症・疫学情報課 】